

月四日管郷十三・驛四の中五郷二驛を削いて能美郡としたから、残餘の八郷二驛が新しい江沼郡になつたわけである。江沼の國訓は初め拾芥抄にある如くエヌであつたが、次いでエヌマに轉じ、今地方人はエンマと訛つてゐる。

エヌマゴホリザイサイシヨシヨキ 江沼郡在々所々記 江沼志稿の中に多くこの語を用いてゐる。江沼郡中の古墟・館跡・神社・佛閣等を集録したものであらうが、今存否を明らかでない。

エヌマゴホリザツキ 江沼郡雜記 一册。加賀江沼郡雜記ともいふ。江沼郡内の學を主とし、山川・道路その他の地誌に及び、御郡奉行領内巡廻のことなども記されてゐる。著者は宮永嘉告。

エヌマシコウ 江沼志稿 三十二册。弘化元年小塚秀得著。加賀江沼志稿ともいふ。

江沼一郡の神社・佛閣・古蹟産物を初め、山川・池塘・關梁・驛・橋梁等の部を分ち細叙する。天保の初め大聖寺藩の家老佐分政長の外、大江知言・宮永嘉告・兒玉延・駒澤成續・安井世信・塚谷長信・山口知定・岡村本方・小塚秀得等が藩主前田利之の命により編輯に著手したが、利之の卒後小塚秀得の私撰となつたものである。

エヌマジンジャ 江沼神社 江沼郡大聖寺町八間道に鎮座し、前田利治・菅原道眞を祀る。初め寶永元年前田利直は菅原を造つたが、廢藩の際之を郡谷寺境内に遷した。次いで明治五年十一月今の地に復して松島天満宮といひ、利治の靈を合祀し、八年五月松島神社といひ、十年二月江沼神社に改めた。

エヌマシンペキジモクソウシ 江沼神壁耳目盤紙 江沼郡山代の人藤掛千崙が、郡内神社佛閣の算額を集め、平常美之を更訂したもので、弘化二年五十嵐小豊次が湯治の際之を見て序文を加へた。その算額は寛政四年から安政五年のもの都合十枚である。

エネゴホリ えね郡 ↓エネゴホリ えね郡。

エノキラ 榎尾 河北郡井上庄に屬する部落。

エノトマリ 江泊 鹿島郡大吞郷に屬する部落。

エノメ 鰻目 鹿島郡能登島庄に屬する部落。エノミ又はヨノミと訛つて書いたものもある。能登島跡志に『鰻目村に常麻氏の十村あり。此村に嶽の宮とあり。皆忍彦神社といへり。』と見える。當嶽は通稱を太間といふた。

エノメノジョウヤマ 鰻目の城山 鹿島郡鰻目村の神明山が海邊に突き出た上にある小さな平地をいふが、城跡ではない。

エノメハツカ 鰻目八ヶ 能登島をいふ。能登島跡志に、『昔は鰻目八ヶの庄とて、八ヶ村ありしと也。』とある。

エノメヲドリ 鰻目鰻 能登島の鰻目では屋外に冷氣を感じざる限りは、男女の青年村那寺の前庭に集合して踊に耽溺する風があつた。この踊は特に定められた音頭取がなく、相交代して踊ふもので、それを鳥踊と稱した。踊り初めは五月の節句踊りをさめは葬九月。』とは鰻目踊のことをいふたのである。

エハク 舞白 羽咋郡宿真宗東派西照寺の僧。心齋院と稱し、天保九年十月舞踊に進み、

十四年十月六日寂した。享年不詳。
エビスカ 海老坂 羽咋郡山内志雄庄にある部落。
エビスザキ 惠比須崎 鳳至郡神波に在る岬。長さ二〇〇米許。
エビスザキ 惠比須崎 鳳至郡甲のうち小甲の海中に突出する所を惠比須崎といふ。上に小祠があつて燈子を祀つてゐる。地方人はこゝを小圓山とも呼んでゐる。
エビスマツリ 夷子祭 舊正月二十日に行はれ、諸商人が夷子を祭つて、營業の繁榮を祈願するをいうた。十月二十日亦之を行ひ、その前後に賣出しを行ふを夷子講といふた。
エビノセナガミツ 海老背長光 津田遠江守重久が有した長光作の刀で、長さ二尺三寸。銘の長字が海老の背の如く曲つて居たから名づける。もと織田信長の佩刀であつたのを明智光秀反亂の時、當時その臣であつた重久に傳はり、次いで前田利常・徳川綱吉・柳澤吉保を経て、尾州徳川氏の重寶となつた。
エヒノメ 鰻目 ↓エノメ 鰻目。
エホウ 舞芳 ↓ケイガンエホウ 桂巖懸帽子岩。
エボシイハ 烏帽子岩 ↓エボシイハ 烏帽子岩。
エホンセツキヨウダン 繪本雪鏡談 十二册。大坂岡田茂兵衛板。出版年月不明。西洲散人著。大槻朝元を大月長元とし、金澤城を鏡山城として、俗傳の加賀騒動を綴つた小説で、尾上岩藤の一件が巻末になつて居る。
エマコウアン 江間口安 江間初代竹林坊の第二子。口科の醫として十人扶持を受け、元祿七年歿。子孫口安・儀竹後竹林坊 江庵 篁

齋久嶺三折後篁齋等相繼いだ。後代は本道になつた。

エマコウサイ 江間篁齋 初め梅庵。諱は久嶺。江庵の子。御醫師として天明六年十人扶持を受け、文化五年十人扶持を加へ、九年新知百五十石、十三年加増五十石、文政五年加百石で合計三百石に至つた。天保七年致仕して俸十人扶持を受け、雀々翁と改め、十二年正月歿した。

エマチクリンボウ 江間竹林坊 前田利家に仕へて口科の醫であつた。その子亦竹林坊といひ、天和元年歿した。子孫慶賀・祖竹・玄貞・清政・玄順・順哲・元林赤忠等相繼いだ。後代は本道になつた。

エマバンリ 江間萬里 諱は眞、天保十一年を以て生まれた。幼名三折、後前田慶寧の命によりて三吉と改めたのは、その詩書畫共に勝れたるによる。萬里初め漢籍を林瑤に學び、十八九歳にして京に上り、刀圭の餘暇山本典藥及び柳石洲に就きて詩文を學び、國に歸りて遂に藩醫となつた。明治の後前田氏に従ひて東京に移り、好んで墨客と交り、詩に在つては山田長寛、書に在つては長三洲と聲名を等しくした。詩稿は自ら之を焚いたから存するもの甚だ稀である。明治三十九年歿、享年七十一。

エミトウジュウロウ 江見藤十郎 初め前田利家馬廻の士であつたが、後命ぜられて村井長頼の與力になつた。天正十二年佐々成政が、長頼の朝日山の嶽を攻めた時に藤十郎は阿波賀五郎入と共に使者となつて之を金澤に報じ、同年の末森の役、翌年の蕪沼の戦にも功があつた。村井家記には之を藤八に作り、